①ふれあい大橋の会（福岡県久留米市）

（構成：大橋地区社会福祉協議会、大橋地区民生委員児童委員協議会、
大橋校区まちづくり委員会）

②《活動主体の概要》（平成 27 年 4 月 1 日現在）

○総 人 口：　１，９４８人
○高齢者数：　　６８３人
○世 帯 数：　　６８０世帯
○産業構造：　農業中心
○地理的構造：南に耳納連山の山容、中央部を流れる巨瀬川、北に筑後川のある平坦な純農業地帯。
○高齢化率：　３５．１％。増加中。　昼間独居の家庭も多い。

③活動のきっかけ

地区社会福祉協議会主催のボランティアスクールの卒業生を中心として、地域の関連団体（地区社会福祉協議会、民生委員児童委員協議会、校区コミュニティ組織、女性の会等）のメンバーにも声をかけ、昭和６３年頃、「大橋ふれあいの会」としての活動が始まりました。３０名程度のメンバーで構成されています。自分から積極的に参加される方もおられますが、昔からの地域のつながりで、人から誘われて参加された方が多いです。地区社会福祉協議会主催のボランティアスクールは現在も開催されており、当会も受講しています。最近のテーマは「地域包括支援センターの活用について」「高齢者の熱中症予防について」「悪徳商法の手口とその撃退法について」等、地域での高齢者支援に必要な内容を幅広く学んでいます。

④活動方法

○月１回程度の活動
内容：総会、ボランティアスクール受講、異世代との交流会、視察研修、手作り弁当の配食、敬老会、歳末訪問、サロン活動　など

○手作り弁当の配食：年に４回、お弁当を作って独居高齢者宅へ届けています。献立きめ、材料の買い出し、調理、配達を行っています。事前に校区だよりでお知らせし、配達時にはお話をし、高齢者の状況の把握も行っています。

○異世代交流：７月に高齢者と学童の生徒とで七夕飾り作りを通して交流をしています。また、歳末訪問活動時に小学生からのメッセージカードを配布しています。

○視察研修：特別養護老人ホームなどを視察しています。

○随時の活動
ふれあい訪問活動（班単位の活動）：主な対象者は独居高齢者で、現在校区内にいらっしゃる２９人の独居高齢者の方を把握し、訪問活動を行っています。班単位で訪問をしますが、普段が一番大事だと考えているので、近所の人がみんなで日ごろから見守りをするようにして

います。昔から住んでいる人が多いので、近所も顔見知りで、「最近様子を見らんね」「様子を見に行ってみようかね」など、情報交換をしています。

⑤工夫点

ふれあいの会のなかに、校区社会福祉協議会、民生委員児童委員協議会、校区コミュニティ組織、女性の会等の地域の関連団体のメンバーがいるので、各団体と連携が取れており、見守り対象者についての情報交換ができる状態にあります。最近姿を見ないといったことがあれば、近所の方に見に行ってもらうなど、連絡体制もできています。

また、地域包括支援センターとも連携を取るようにしています。昔からのつながりが強い地域なので、住民が顔見知りでお互いのことをわかる関係である反面、つながりが強いからこそ個人的な問題を相談しにくい場合もあるので、そのようなときは地域包括支援センターを紹介することもあります。

⑥成果

サロンに来られるのは比較的元気な方ですが、楽しかった、来てよかった、と言われます。サロンで運動をすることが身体にいいような気がすると言われる方もいらっしゃいます。継続して参加していただくことが、家から出てくるきっかけになっていると思います。

また、歳末の独居高齢者宅訪問時には地域の小学生からのメッセージカードをお渡ししたり、7月には高齢者と小学生が一緒に七夕飾りを作ったりといった世代間交流を通して、独居高齢者は子どもたちと触れ合う機会を持ち、小学生は地域の方と顔の見える関係づくりができ、安全面での効果もあります。

⑦課題

どこの校区にもある問題なのかもしれませんが、ボランティアのなり手が少なく、ボランティアの人数自体が減少していることが課題です。若い世代は仕事をしていますし、定年退職をしても、農業に従事している方が多いので、なかなか時間が取れないという方が多い状況です。配食のお弁当を作ってくれる方も少なくなっています。

また、サロンの参加者やふれあいの会のメンバーは女性の割合が多いですが、それに比べると女性のリーダーの割合は少ないように思います。女性が地域活動に積極的に参加し役割を担っていくには家庭の理解も必要であるので、女性も積極的に参加できるような地域環境づくりも必要だと思います。

⑧代表者、事業者等の声

独居高齢者は日常のちょっとしたことでも自分で行うのは困難なことがあります。例えば庭の木の枝が伸びているのを切ることも、ちょっとしたことに思えますが難しい。これから高齢化が進み独居高齢者も増えていくと予想されるなかでこのような要望は増えていくと思います。そういったとき、小さなことでも連絡すると受け付けて対応できるような体制づくりが今後必要になっていくのではないかと思います。